みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

清朝時代伊克昭盟盟長バダラホの奏凱図：『圖開勝跡』が描くオルドス七旗

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): Ordos Mongols ｜ Prince (Jasagh) Badaraqu ｜ “Return of the Army in Triumph” ｜ the Hui Rebellion ｜ Liu Futang ｜ Yulin 作成者: 楊, 海英 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003946

国立民族学博物館研究報告32(4): 629-657 (2008)

清朝時代伊克昭盟盟長バダラホの奏凱図
──『圖開勝跡』が描くオルドス七旗──

楊　　海　英*

"Return of the Army in Triumph" by Badaraqu, Ordos, Yeke Juu League

Yang Haiying

清朝の光緒年間の初期に，「中興の臣」とされる左宗棠の部下で，湖南出身の劉福堂（別名劉厚基）という人物が赴任先の陝西の要塞都市である楡林で『圖開勝跡』という漢籍を編集した。同書には清朝末期の楡林地域の碑刻などが数多く抄録されているだけでなく，ときの辺疆における軍事状況を反映した絵画や隣接するオルドス・モンゴルを描いた地圖と絵画，さらにはオルドス・モンゴルの盟長をつとめていたバダラホ（1808–1883）が書いた満洲語の文章も収められている。こうした豊富な内容を有する『圖開勝跡』は清朝の西北部から中央アジアの東部までを巻きこんだ回民反乱時の陝西地域とオルドス地域の社会を活写した第一級の資料である。

劉福堂とバダラホ王の二人は協力し合って陝西北部の回民反乱軍を鎮圧した。反乱鎮圧後，バダラホ王は劉福堂の本『圖開勝跡』のなかに「凱旋圖」を書き添えて，自分の戦功をアピールした。「凱旋圖」にはオルドスの7つの旗内にある寺院や遊牧民の天幕と家畜群，それに王（ジャサク，札薩克）の住む宮殿が活写されている。本論文ではまず「凱旋圖」が成立した歴史的な背景を解説し，その上で同圖が伝えるオルドス7旗の歴史的・民族学的情報を抽出し整理する。バダラホ王の「凱旋圖」は19世紀末のオルドス・モンゴルの政治と社会を研究するのに欠かせない重要な資料であることが明らかになった。

In the early phase of the Guangxu (光緒) era, during the Qing dynasty, a Chinese administrator called Liu Futang (劉福堂 , also known as Liu Houji 劉厚基), who came from Hunan province, was engaged in the compilation of a historical book titled "*Tukai Shengji*" (圖開勝跡). This book was written

*静岡大学人文学部社会学科

Key Words：Ordos Mongols, Prince (Jasagh) Badaraqu, "Return of the Army in Triumph", the Hui Rebellion, Liu Futang, Yulin

キーワード：オルドス・モンゴル，バダラホ王，凱旋圖，回民反乱，劉福堂，楡林

in Chinese. Liu Futang served the renowned Chinese statesman and military leader Zuo Zongtang (左宗棠). Zuo Zongtang is famous for his allegiance and distinction in his political and military career. He saved his country from civil wars and conflicts against foreign powers, thus re-establishing the power of the Qing dynasty, which had been suffering from serious crises undermining Chinese sovereignty. The compilation of the book was carried out in Yulin (榆林), a fortress town in Shanxi province, where Liu Futang and his troops were stationed. Included in the book are not only many epitaphs collected near Yulin around the end of the Qing dynasty, but also paintings and drawings depicting military expeditions along the frontier regions of China. The book also contains maps and paintings of Ordos, Mongolia. Furthermore, it is worth noting that it includes a collection of writings in the Manchurian language, written by Jasagh Badaraqu (1808–1883) of Ordos Mongolia. "*Tukai Shengji*" is an excellent collection of historical materials vividly describing the circumstances of Shanxi and Ordos around the end of the 19th century, when the Hui Rebellion broke out, spreading over a vast region of north west China and the eastern part of Central Asia. As far as I know, however, no in depth research of this book has been presented in the academic circles of Mongolian studies before.

Liu Futang and Jasagh Badaraqu coordinated their military efforts and together calmed the Hui rebellion in north Shanxi. After successfully suppressing the Hui uprising, King Badaraqu had several picture scrolls titled the "Return of the Army in Triumph" incorporated into "*Tukai Shengji*", which was being compiled by Liu Futang. It is understood that, by doing so, King Badaraqu was pursuing publicity for his military distinction. Graphically depicted in these scrolls are temples in the seven Ordos banners in those days, tents and livestock owned by nomad tribes, the palace of Jasagh and other items. This paper extracts, streamlines and presents historical as well as ethnological information about the seven Ordos banners that is incorporated into these seven picture scrolls. Based on that information, this paper discusses the historical background against which the scrolls were produced, thus analysing the specific nature of the paintings. It has been proved that these picture scrolls, the "Return of the Army in Triumph", are indispensable historical materials for us to understand Ordos Mongol politics and society around the end of the 19th century.

1　はじめに――地圖と絵画研究の重要性
2　湘勇が夢見た「中外一家」
3　凱旋圖作成の背景
4　奏凱圖の詳細
4.1　オルドス右翼前旗（ウーシン旗）
4.2　オルドス右翼中旗（オトク旗）
4.3　オルドス右翼後旗（ハンギン旗）
4.4　オルドス右翼前末旗（ジャサク旗）
4.5　オルドス左翼前旗（ジュンガル旗）
4.6　オルドス左翼中旗（ジュワン旗）
4.7　オルドス左翼後旗（ダラト旗）
5　おわりに――奏凱圖の特徴

清朝の光緒年間の初期，「中興の臣」たる左宗棠の部下で，「楚南の劉福堂」との称号を有する劉厚基が赴任先の陝西の要塞，楡林という町で『圖開勝跡』という書を編集した。「楚」とは現在の湖南省の古い名称で，左宗棠の故郷である。『圖開勝跡』には清朝末期の楡林地域の碑刻資料が数多く抄録されているだけでなく，ときの辺疆における軍事状況を反映した絵画や隣接するオルドス・モンゴルを描いた地図と絵画，さらにはオルドス・モンゴルの王公が書いた満洲語の文章も収められている。このような『圖開勝跡』は清朝の西北部から中央アジアの東部までを巻きこんだ回民反乱時の陝西地域とオルドス･モンゴル[1]の社会を活写した第一級の資料であるが，管見の限り，いままで学界で詳しく紹介されたことはなかったようである。

劉厚基は左宗棠の忠臣として，陝西北部の回民反乱軍を鎮圧するのに大きな役割を果たした。これにオルドス・モンゴルの有力者で，当時伊克昭盟（イケジョーアイマク）盟長をつとめていたオルドス右翼前旗（ウーシン旗）のジャサクであるバダラホ王（Badaraqu, 1808–1883）も積極的に呼応した。劉厚基とバダラホ王の 2 人が具体的にどのような作戦を展開し，勝利のあとにまたいかに戦功をアピールしたかについて，筆者は以前に劉厚基自身の編著『圖開勝跡』内の記述と，楡林地域に残る碑刻資料とあわせて検討した（楊・奇 2007: 49–75）。『圖開勝跡』にはまたオルドスのバダラホ王が描いた奏凱圖（凱旋圖）が収められている。本論文では，この奏凱圖が伝えるオルドス七旗の歴史的情報を抽出し，整理する。

1　はじめに――地圖と絵画研究の重要性

13 世紀のモンゴル帝国時代以来，モンゴル人は数多くの地圖類や絵画類を残してきた[2]。北元を経て清朝時代に入ると，モンゴル各部も中央集権体制に組みこまれ，

次第に地域集団の道をあゆんだ。各地のモンゴル人は清朝の政策にのっとって数年ごとに地圖をつくり，中央政府と地元盟旗政府に一部ずつ上呈するようになっていた。近代の地理学的な地圖とは異なるものの，モンゴル人がどのように方位・方角を認識し，いかなる宇宙観を有していたかを示す第一級の資料群である，と研究者らに高く評価されている（Heissig 1978: X–XV）。地圖に登場する無数の地名は，モンゴル人が広範囲にわたって実に細かな土地勘をもっていたことを表している（Heissig 1966: VII–XII）。このような地圖群は以前から各国の研究者たちにとりあげられてきた。例えばドイツのウド・バークマンは地政学の立場から言及し（Barkman 2000: 27–31），最近では二木や上村らが地圖そのものだけでなく，清代ハルハ・モンゴルの公文書との関連性とあわせて分析する研究を公表している（Futaki and Kamimura 2005）。

イケジョー盟ことオルドスの清朝時代の地圖にもっとも早く注目したのは，この地で長く布教活動に従事していた，ベルギー王国出身のモスタールト師である（Mostaert 1934: 49）。モスタールト師はオルドス右翼中旗すなわちオトク旗衙門に伝わる「オルドス七旗圖」を入手し，公開している（Mostaert 1956: 81–124）。モスタールト師は，地圖が作成されたのは 1740 年から 1744 年のあいだではないかと分析している（Mostaert 1956–1985）。その後，ハイシッヒがオルドスの右翼末旗（ハンギン旗），左翼前旗（ジュンガル旗），それに左翼中旗（ジュンワン旗）を描いた地圖をあいついで発表し，地圖に描かれた歴史学的情報の重要性を強調している（Heissig 1944: 123–173）。

以上は宣教師たちやヨーロッパの研究者らが入手し，かつ学界で発表したものである。そのほかにもさまざまな地圖や絵画類が収集され，ヨーロッパにわたっていたことが近年次第に明らかになっている。カトリックの聖母聖心会の宣教師たちがオルドス西部の右翼前旗ことウーシン旗とオトク旗に初めて足を踏み入れたのは 1874 年春のことである。このとき，宣教師ヴェールリンデン（Verlinden）がタマガライ（Tamaγalai）というところにあったウーシン旗のジャサク・バダラホの宮殿[3] を訪れている（Van Hecken 1949: 73–77）。ヴェールリンデンが作成したとされる地圖が最近タベイルネによって公表されている（Taveirne 2004: 231–233，圖 1）。地圖上，オルドス七旗は満洲語で表記されている。ヴェールリンデンが描いたというよりも，当時のオルドスに存在していた満洲語の地圖をそのまま書き写したのであろう。

従来，ハイシッヒらが研究し，公開してきた地圖類には人物や家畜などが描かれることはほとんどなかったようである。地圖と一般的な絵画は勿論性質を異にするが，本論文であつかう「奏凱圖」は人物や家畜も登場する地圖で，あるいはモンゴルの伝

統的な地圖と絵画の中間的な存在である，と位置づけることができよう[4)]。

1993 年 2 月，筆者はベルギー王国の首都ブリュッセル市郊外にある聖母聖心会スキュート派の本部を訪れ，同会の中国博物館（China Museum Scheut）で「モンゴルの集落生活と官員の来訪」（*Mongools dorpsleven en komst van hoge ambtenaren*）という絵画の存在に注目した。この絵画は 1870 年代にオルドスからベルギーに持ち出されたものである。絵画には清代王公たちの「会盟」,「ジャサクの行列」,「移動と設営」,「屠殺と搾乳」,「寺院」と「狩猟」などのシーンが活写されている（楊 1994a: 382–393, 1994b: 116–122; Yang 1995: 1–11）。詳しくは後述するが，本論文が解析する「奏凱圖」にも「モンゴルの集落生活と官員の来訪」と共通した特徴がみられる。

2　湘勇が夢見た「中外一家」

2007 年 1 月，筆者は内モンゴル自治区ウーシン旗在住の友人，チャガライ[5)]（Čaγalai，漢名奇景江，2007 年現在 46 歳）から『圖開勝跡』という漢籍を入手した。オリジナルは現在陝西省榆林市档案館に所蔵されているという。榆林市档案館には数多くのモンゴル関連の書籍や文書が保管されているが，オルドス･モンゴルとのあいだに深刻な境界問題を抱えているために，内モンゴル側のモンゴル人には頑なに門戸を閉ざしたままとなっている。たとえ政府関係者からの紹介状があったとしても，見せてもらえないそうである。『圖開勝跡』を入手した後，筆者は北京にある中国国家図書館でも調査してみたが，同書は館内になかった。恐らく，きわめて珍しい版本ではないかと考えられる。

『圖開勝跡』を編纂したのは，劉厚基という人物である。編纂者不明の『清史列伝』巻五十六にその略伝がある。それによると，劉厚基は湖南耒陽の出身で，武童の身分で投軍し，「四川の賊」を剿滅する戦いで軍功をあげ，藍翎を獲得し，把総となる。一貫して「臨陣勇鋭」で，1863（同治二）年に副将に抜擢され，「猛勇巴圖魯（バートル）」の名號を授けられる（『清史列伝・巻五十六』1987: 4424）。「巴圖魯」とは「英雄」との意味である。

劉厚基はその後に左宗棠に追随し，「三楚子弟」からなる湘勇を率いて西北回民反乱軍の鎮圧にかかる。たびたび軍功をたて，1866（同治五）年には「西林巴圖魯（バートル）」の称号を与えられる。回民反乱軍を追撃中に，一時，軍情の報告が不実で，加えてその弟が浪費した不祥事などで疏劾を受ける。しかし，群を抜く軍事才能があるゆえに，1868（同治七）年 8 月に陝西延綏鎮総兵に任命される。榆林や定辺，それにオルドス

南部に盤踞する回民反乱軍を殲滅するのに，大きな功績をたてたが，1877（光緒三）年に卒したという（『清史列伝・巻五十六』1987: 4426–4427）。別の情報によると，亡くなったとき 38 歳だったという。本論文で扱う『圖開勝跡』のほか，『戦功紀録』，『紀思慕義』などといった著作もある。赴任先の民と共楽し，功績が高く評価されたため，楡林の民衆は劉厚基を記念する「劉公祠」を建てたという（賀 1995: 45）。

楡林市北 3 キロメートルの楡渓河両岸に紅石峡（別名雄石峡，雄山寺）という名勝がある。宋元時代からの名刹で，歴代王朝の摩崖や石碑が多数残っている。第 19 号窟をはじめ窟内に劉厚基の詩文が多く刻まれている。劉厚基の要請を受けて，かの左宗棠の揮毫も勒されている（賀 1995: 6, 44–45, 67, 82–87）。劉厚基は文武両道の才人だった。

陝西省北部で回民反乱軍を鎮めるのに，力を惜しまずに協同作戦を展開したのは，ときの伊克昭盟盟長で，オルドス右翼前旗（ウーシン旗）ジャサクのバダラホだった。当時のオルドス・モンゴルを，南国出身の楚人劉厚基は自らが『圖開勝跡』に寄せた「筹邊記」に次のように描いている。

> 筹邊記
> 楡関雄鎮也。内蔽延綏，外控蒙古鄂爾多斯七旗，相為唇歯。……（中略）昇平日久，中外晏然。同治初年，狅紇乱紀，流毒秦隴。……（中略）余莅鎮之初，歳在戊辰年。……（中略）復思遠交近攻，兵家上策。茫茫沙磧，耳目難周，因約蒙王互為策応，賊縦所到声息相通，必使鋌鹿釜魚無従漏網。於是會合金宋諸軍，排比而前，旁撥深入，遂奏十里長灘，三道河，孟家湾諸大捷。……（中略）蒙旅亦具彙韃以従，中外一家……（以下略）

劉厚基は雄関楡林の「延綏を内蔽し，オルドスを外控する」という軍事戦略上の意義をじゅうぶん認識していた。戊辰の歳すなわち 1868（同治七）年に着任してから，モンゴルの王たるジャサクらと積極的に策応し，オルドス東部の十里長灘，同地域南部の三道河や孟家湾などの大捷を得た。これには蒙旅ことモンゴル軍も協力し，「中外一家」の理想が実現されたという。ちなみに，紅山峡には明代の石刻として「華夷天塹」のような表現があり，中華と夷狄との自然の境界と認識されていた。ところが，清代になると，「中外一統」に変化し，中華民国時代には「漢蒙一家」という題辞も見られるようになる（賀 1995: 29, 57, 61; 楊・奇 2007: 49–75）。湘勇の天才劉厚基も当時は「中外一家」を信じて疑わなかったようである。

3　凱旋圖作成の背景

奏凱圖を描いた目的について，『圖開勝跡』内の「楚南福堂氏跋」文は次のように述べている。

> 熙朝開拓疆域，遠邁漢唐，中外一家，遠来近悦，凡拳山寸土莫不盡隷版圖。就楡林而論，則外有蒙古鄂爾多斯七旗……（中略）余莅鎮之初，狅紇正熾，一経剿急輒以草地為逋逃藪，蒙古牲畜多被駆掠，各旗苦之。因訂會哨之約，彼此聞警互相救援，深入冥挖久，始根株罄盡辺境粛清，毡幕毳廬晏然，遊牧五勝旗尤属蜜邇，休戚相関，曽繪奏凱圖以志戦事，茲復圖其七旗界址

以上の記述からみると，『圖開勝跡』の編纂者劉厚基にとって，奏凱圖はまず「以志戦事」つまり戦乱の経緯を記録し，功績を誇示するために作成されたことが分かる。

では，『圖開勝跡』に文章と絵画を寄せているバダラホの目的は何だったのだろうか。

盟長バダラホ自身が『圖開勝跡』に寄せた文章では繪圖のプロセスを次のように述べている。

> 余世受国恩，忝在邊陲，為七旗盟長屏藩京室。戊辰冬甘狅突竄，寇掠無算，輿戦則遠颺，兵退則至，閭閻徙幾不聊生。次年秋劉福堂軍門追賊於邊墻外，函致余，余率師迎之於五都才當，遂定議會，哨外地有誓，軍門則不辞労瘁，星夜来援，内地有誓余亦如之。竊以蒙古七旗為長城之鎖鑰，邊園之捍衛，偶一疎虞為害匪浅，軍興以来枕戈待旦，方自恨孤立之無助，茲何幸数年之内，関門無警，既息我人民，復蕃我牛馬，使邊地数千里安堵如常者非軍門之賜耶。現聞秦隴之賊負嵎者□□殄滅，效順皆受撫，綏四境粛清，捷聞於上，軍門約余奏凱楡城，繪圖一幅命序於余，因述其巔末以報之。巴旦爾呼繙文見前。

「甘狅」は戊辰年冬，すなわち1868年冬にオルドスに侵入してきたのである。翌1869年秋，劉厚基こと福堂軍門が反乱軍を追って辺墻長城外のオルドス領内に入ったところ，盟長バダラホは軍を率いてウダンチャイダム（五都才當，Udančayidam）という地で合流し[6]，合同作戦の議が展開されることとなる。双方が支援しあうことを約束し，オルドス七旗は長城の鎖鑰であるとの認識が得られた。数年後，「秦隴の賊」も大半が鎮圧され，平和が戻ったところで，盟長バダラホも楡林城での凱旋式に呼ばれた。奏凱圖を描き，漢文と満洲語両方による序文には上記の顚末が記されている。上記の文末に「巴旦爾呼繙文見前」とあるように，『圖開勝跡』にはバダラホの

満洲語の序文も収録されている[7]（楊・奇 2007: 71–75）。このように，バダラホ王も功績を残そうと努力していたのは事実であろう。

バダラホ王にはもう 1 つの目標があった。それは，回民反乱軍の影響によって，七旗の界址があいまいになった現実を是正するねらいだった。

清朝時代には原則としてモンゴル人の越境遊牧が禁止されていた。すでに触れたように，各旗は数年に一度旗の領域を地圖として描いて中央政府に報告する義務があった。ところが，回民反乱軍がオルドスに闖入したとき，モンゴル人たちは境界を越えて逃亡した。筆者は以前オルドスにおいて，回民反乱時のモンゴル人の避難と移動に関する情報を聞いたことがある。回民反乱軍が 1860 年代にオルドスに進入したとき，西部ウーシン旗の遊牧民が大挙して東のジュンガル旗あたりへ 8 年間逃避していた（楊 2002a: 491–492, 2007: 56）。このような背景から，反乱収拾後の界址の確認作業は盟長バダラホらにとって，急務の 1 つだったにちがいない。

4　奏凱圖の詳細

以下では奏凱圖に描かれたオルドス七旗の内容を詳しく分析してみよう。なお，圖のなかのアラビア数字の番号は，分かりやすくするために，筆者が付けたものである。

4.1　オルドス右翼前旗（ウーシン旗）

オルドス右翼前旗ことウーシン旗の画面にはジャサクの宮殿オルド，寺院，遊牧民の天幕と畜群などが確認できる（圖 2）。

ジャサクの宮殿：

「盟長ジャサク・ウーシン貝勒（ベイレ）の住まうオルド」（čiγulγan-u terigün jasaγ Üsin beyile-yin saγuγsan ordun，①）は画面の左中央にある。中国式の固定建築で，正面に影壁（えいへき）[8]が建ち，周囲に樹林がある。影壁の前に役人風の人物が 2 人立っている。当時，貝勒（ベイレ）バダラホのオルドはタマガライという地にあった。民間ではタマガライ・シャンと呼ばれていた。

寺院：

ウーシン旗の場合，画面の右側に寺院が 2 ヶ所描かれている。いずれも固定建築と佛塔から表現されている。ウーシンジョー寺（Üüsin Juu-yin süm-e，②）は上端に，ガイハムシクタイ・ウーレト寺（Γayiqamsiγtai Eguletü süm-e，③）は下端にある。

ウーシンジョー寺はウーシン旗最大の寺院であると同時に，オルドスの名刹の 1 つ

でもある。最初はナンソ寺（Nangsu-yin süm-e）と呼ばれ，モスタールト師が伝えた1740年代のオルドス七旗圖内でも，ナンソ寺との名で示されている（Mostaert 1956: 99; Narasun 2000: 233–234）。はじめのうちは天幕の寺院だったが，1712（康熙五十一）年に固定建築が建ち，乾隆年間に皇帝より「勅命を賜って建てられた大藏経の寺院」（Ayiladqaju Jalaγsan Γanjuur Nom-un Keyid）という名称が与えられた（Qassudu and Qasbiligtu 1989: 2–3; 楊 2005: 100–102）。初代の活佛はハルハ出身でララムバ（Lharamba）の称号をもつロブサンドルジという人物で，1764年に寺に就任している（楊 2005: 102）。

固定建築に拡大したり，活佛をチベットから招請したりするなどは，すべてウーシン旗のジャサク主導でおこなわれたものである。言い換えれば，ウーシンジョー寺はウーシン旗ジャサクの菩提寺だったのである。バダラホも例外ではない。彼はジャサク就任早々に，ウーシンジョー寺の高僧とともに年代記を編纂している（Yang 2003; 楊 2005: 74–116）。

チベット語で書かれた『ウーシンジョー寺縁起』[9] によると，回民反乱がオルドスに波及したとき，ウーシンジョー寺も1868（同治七）年陰暦10月に襲撃を受けた。反乱軍は3日間にわたって放火と略奪をくりかえしたという（Qassudu and Qasbiligtu 1989: 126）。1871（同治十）年4月，「寺院を速やかに修復し，牧人のために祈願せよ」との要請が盟長バダラホから届く。バダラホ王はさらに活佛と僧侶たちを自らの宮殿オルドに招いて，7日間の法事をおこなった（Qassudu and Qasbiligtu 1989: 127）。修復に必要な銀両もバダラホと旗内の有力者である鎮国公のバラジュール（～1895）らから供出されている。修復工事は1888年まで続いたという（Narasun 2000: 234–235）。

清朝が崩壊し，中華民国を経て中華人民共和国が成立するまでの歴史的な潮流のなかで，ウーシンジョー寺はずっとオルドスの主な政治舞台の1つでありつづけた。あらゆる寺院などの宗教施設が共産党に破壊された中国文化大革命時（1966–1976）には，寺の近所出身のボロルダイ（Boruldai）という女性が共産党中央委員会の委員に選ばれ，ウーシンジョー公社が中国全国の模範たる「牧区大寨[10] ウーシンジョー」に認定されたため，無事難を逃れることができたのであろう。

ガイハムシクタイ・ウーレト寺は民間ではシャラ・ジョー（Sir-a Juu,「黄色い寺」との意）との名で親しまれ，鎮国公バラジュールの菩提寺だった。寺の高僧もバラジュール家出身者が多かった。もともとウーシン旗西部のシャルリク（Sir-a Elige）という地にあった，小さな祠だったが，それでも回民反乱軍の破壊からは逃れられず，

1867（同治六）年に倒されている。反乱の嵐が去ったあと，ウーシン旗西部に拠点を置く鎮国公バラジュールの主導で，49 軒からなる固定建築の寺院が 1875（光緒元）年に造営された。『ウーシンジョー寺縁起』によると，寺が完成された 1876（光緒二）年 6 月，バダラホ王とバラジュール公らの出席のもと，ウーシンジョー寺の活佛も駆けつけて，盛大な祝賀行事がおこなわれたという（Qassudu and Qasbiligtu 1989: 125）。

寺には皇帝より瑞雲寺との勅命が与えられている（Narasun 2000: 240–241）。清末から中華民国期にかけて，ラクワジャムソ（Raγbajamsu）という僧が寺の運営を主導し，オルドスで布教していたカトリック教の宣教師たちとも親交していた（Serruys 1978; 楊 2001: 32）。

瑞雲寺は非常に美しい寺院だった，とゲシクバトら著名な詩人たちも謳歌していた（楊 2002b: 6, 56–59, 2005: 207–208）。文化大革命が発動された直後に破壊され，今や何も残っていない。

回民反乱軍をオルドスから撃退するのに，ウーシン旗の貝勒バダラホと鎮国公バラジュールは，「乗っていた白い馬が赤色に染まるほど戦った」と伝承されている（楊 2002a: 492）。清朝側の公式記録である『穆宗毅皇帝実録』巻一百四・十二によると，1864（同治三）年五月に，「以捐備槍馬賞図薩拉克斉協理巴拉珠爾花翎」とある（『穆宗毅皇帝実録』：p 2662）。バラジュール公は槍馬を提供するなど，財政的な貢献も惜しまなかったらしい。このように，ウーシン旗の版圖内にウーシンジョー寺と瑞雲寺という 2 つの寺院を描いたのは，バダラホ王とバラジュール公という二人の実力者を突出させるためであろう。

天幕・家畜群：

バダラホ王が盟長の任にあった 19 世紀後半，オルドス・モンゴルは遊牧生活を営んでいた。そのため，遊牧民の住居は天幕でもって表現されている。ウーシン旗の版圖内には合計 3 ヶ所に天幕が描いてある。天幕の周りには木の柵があり，近くには更に家畜囲いもみられる。

注目すべきはキー・モリ（kei mori, ④）という旗幡である。キー・モリとは「風の馬」との意味で，チベットに由来するとの説もあるが，モンゴル人は古くから崇拝してきた軍神スゥルデの変容だろうと理解している。現代オルドスのキー・モリはだいたい鉄製の三叉に絹布をつけたかたちとなっているが，絵画では 2 種のキー・モリがある。天幕の近くに立つ，より高い木竿と柵の上に掲げられた旗の 2 種類である。天幕近くの木柵かあるいは天幕に直接キー・モリを飾る習慣は，モンゴル国南部のゴビ地域で今でも確認できる[11)]。

画面上のウーシン草原には馬群と牛がいる。馬群の近くには地べたに座る遊牧民が2人いる。このほか，馬に乗った人物が3人描かれている。

4.2　オルドス右翼中旗（オトク旗）

次に視点をオルドス右翼中旗（オトク旗）の版圖（圖3）に転じてみよう。

ジャサクのオルド：

オトク旗のジャサクの宮殿オルド（jasaγ Otoγ beyile-yin saγuγsan ordun, ①）は画面の右下に設定されている。目隠し塀の影壁がある固定建築のまわりは樹林に囲まれている。固定建築は庭を中心に3つの建物から表現されている。影壁の前には役人と従者らしき人物が立っている。19世紀末，オトク旗ジャサクの宮殿オルドはシャラ・ブリド（Sir-a Büridü）という地にあった。バダラホが奏凱圖を描いたときのオトク旗のジャサクはチャクドゥルジャブ（Čaγdurjab 在位 1862–1881）であった（趙 1976: 8440; Van Hecken 1972: 140–141）。

寺院：

ギョク・ウスンジョー寺（Köke Usun Juu-yin süm-e, ②）はオトク旗版圖内の左上に描かれている。固定建築と佛塔からなる寺の名はギョク・ウスンジョー寺である。

ギョク・ウスンジョー寺はまたシニ・ウスンジョー寺（Sin-e Usun Juu）という名でも知られている。オトク旗のほぼ中央に位置するイケ・ウス（Yeke Usu,「大いなる水」の意）という地に建っていた。イケ・ウスはまたグン・ウス（Gün Usu-yin Töküm,「深い水の盆地」の意）とも呼ばれていた。寺はオトク旗のノミンジド妃（Qatun Nominjid）とジャサクのソノムラブジャイゲンドン（Sodnamrabjayigendun）らの推進で1824（道光四）年に建設されたものである（Narasun 2000: 94）。寺のチベット語名はラシバラダンダルジャイリン（Rasibaldandarjayiling）。以上で示した地名と旗ジャサクとの強いゆかりのゆえに，ギョク・ウスンジョー寺はまたイケ・ウスンジョー寺，オトク・ジョー寺などとも呼ばれていた。緑色の瑠璃瓦をふんだんに使用していたことから，ノゴーン・ジョーすなわち「緑の寺」とも称されていた（Narasun 2000: 94）。

ギョク・ウスンジョー寺はオルドスの名刹の1つで，オトク旗の49の寺院を管理する度牒寺（dudiy-e keyid）でもあった。寺が建てられた後の祝賀行事にはジャンジャー（ジャンガー）・ホトクトも駆けつけたという（Narasun 2000: 95）。このときのジャンジャー・ホトクトは第十六代ジャンジャー・ホトクトで，京師のジャサク・ラマ（札薩克喇嘛）をつとめ，大国師の印を皇帝より掌賜された人物である（橋本

1942: 157)。このようなことからみると，政治とのつながりもきわめて強い寺院だったようである。

回民反乱軍はオトク旗領内でも長く略奪してまわったため，ギョク・ウスンジョー寺も破壊を受けた。その後，1887（光緒一三）年から 1898（光緒二十四）年まで修復工事がつづく。中華民国時代に入ってから，内モンゴルに長期滞在していた九世パンチェン・ラマもここを訪れている（Narasun 2000: 95)。また，モンゴル人民共和国から中華民国に「亡命」し，その後はさらにアメリカに渡って，「歩く歴史学者」たるラティモアのインフォーマントとなったディルワ・ホトクトも 1934 年冬にアルジャイ（Arjai）石窟[12] を経由して，ギョク・ウスンジョー寺を訪問していたという情報を現地で聞いたことがある。

天幕と家畜：

オトク旗の版圖内でも天幕は 3 つ描かれている。いずれも 2 種のキー・モリ（③）を有する構圖である。草原には馬群，牛群のほか，ラクダに乗った人物も確認できる。オトク旗は昔からラクダの多い旗だった実態を表している[13]。

4.3　オルドス右翼後旗（ハンギン旗）

オルドス右翼後旗すなわちハンギン旗の版圖内にもジャサクの宮殿オルド，寺院，天幕と畜群などが活写されている（圖 4)。

ジャサクの宮殿オルド：

「ジャサク・ハンギン貝子（ベイス）の住まう宮殿オルド」(jasaγ Qangin beyise-yin saγuγsan ordun, ①）は画面の左中央部にある。影壁のある固定建築である。宮殿の周囲に樹木があり，鞍のついた馬が一頭木につながれている。ハンギン旗ジャサクの宮殿オルドはかつてオルギク・クベー（Orgiqu Köbege）にあり（楊 2002b: 162)，この奏凱圖が描かれたときのジャサクはバトマンナイ（Batumangnai，在位 1857–1880）だった（趙 1976: 8443; Van Hecken 1972: 147)。

寺院：

画面の右上に固定建築と佛塔からなる大きな寺院があり，モンゴル文字でホローン・ジョー寺（Qoruγan Juu-yin süm-e, ②）と書いてある。この寺院は次のオルドス右翼前末旗（ジャサク旗）領内にも描いてあることから，ハンギンとジャサク両旗境界地帯の寺院を描こうとしたのではないかと推察されよう。

ナラソンによると，ホローン・ジョー寺はハンギン旗のジャサクが咸豊年間（1851–1861）に建立されたもので，王の駐営地（ホローン）（qoruγan）に近かったことから，ホローン・

ジョーと呼ばれるようになったという（Narasun 2000: 164–165）。恐らくジャサクのバトマンナイの主導で建てられた寺であるために，ハンギン旗を代表する寺として版圖に登場させたのであろう。なお，ハイシッヒが公開した，1909（宣統元）年に描かれたハンギン旗の地圖内にも，ホローン・ジョーはジャサクの宮殿オルドのすぐ北側に建っている（Heissig 1944: 141）。

天幕と畜群：

キー・モリ（③）のある天幕は 2 つあり，草原には馬，牛，ラクダが放たれている。回民反乱の直後にオルドス東部，北部のハンギン旗，オトク旗を通過したロシアの探検家プルジェヴァリスキーはハンギン旗領内で飼い主を殺され，野生化した家畜群に出会っている（プルジェヴァリスキー 1939: 252–255）。

4.4　オルドス右翼前末旗（ジャサク旗）

オルドス右翼前末旗（ジャサク旗）はオルドス草原のほぼ中央に位置する（圖 5）。奏凱圖の「鄂爾多斯七旗圖」という文字もジャサク旗の上部に書いてある。

ジャサクの宮殿オルド：

オルドス七旗のうち，他の旗のジャサクたちが貝勒（ベイレ）や貝子（ベイス）の爵を有するのに対し，もっとも遅く 1736（乾隆元）年にウーシン旗から離れて形成されたジャサク旗の場合，そのジャサク王は一等台吉か公銜だった。奏凱圖では「ジャサク公銜一等台吉の住まうオルド」（jasaγ güng-ün jerge terigün jerge teyiji-yin saγuγsan ordun, ①）となっている。バダラホが奏凱圖を呈した頃のジャサク王は，ジャナバランジャ（Janabalanja, 在位 1858–1890）だった（趙 1976: 8450; Van Hecken 1972: 148）。

寺院とオボー：

固定建築と佛塔で表現されているホローン・ジョー寺（Qoruγan Juu-yin süm-e, ②）は，画面の右上に描いてある。もし仮に上端を北部と認定するならば，ホローン・ジョーは先述のハンギン旗と隣接する地帯に建っていたことになる。実際，ホローン・ジョーは確かにジャサク旗に近いところ，つまりハンギン旗南部に位置していたが，場所そのものはジャサク旗ではなくハンギン旗である事実を盟長側が間違えるはずがない。

寺院のほか，画面の左右にオボー（③）が 1 つ見える。

天幕と畜群そして狩猟：

ジャサク旗の版圖内に天幕が 2 ヶ所ある。そのうちの 1 つの天幕の近くには，馬に乗った人物が 2 人いる。草原には馬群が放たれている。別のところではガゼル狩りの

シーン（④）が展開されている。猟人たちは猟銃を手に馬に跨っている。このように，ジャサク旗の画面は躍動感が強く設定されている。ガゼル狩の風景は，ベルギーに伝わる「モンゴルの集落生活と官員の来訪」内の狩猟風景と似通っている（楊 1994a: 390）。

4.5　オルドス左翼前旗（ジュンガル旗）

オルドス左翼前旗ことジュンガル旗の版圖の画面下半分は草原となっており，馬群と牛群，それにラクダが草を食んでいる。画面の上半分はジャサクの宮殿オルド，寺院と天幕などの世界となっている（圖 6）。

ジャサクの宮殿オルド：

ジャサクの宮殿は，「副盟長で，ジャサク・ジュンガル貝勒（ベイレ）の住まう宮殿オルド」（čiγulγan-u ded terigün jasaγ Jegün Γar-un beyile-yin saγuγsan ordun, ①）と表現されている。影壁のある宮殿は画面の右中央にあり，役人風の人物が 4 人その前に立ち，みな右方向へ向いている。宮殿の前を，牛群を追う徒歩の牧人が左へ歩いている。

『清史稿』によると，このときのジュンガル旗のジャサクはジャナガルディ（Janaγardi，在位 1852–1901）だった。彼は 1854（咸豊四）年に貝勒に昇進している。副盟長を長くつとめ，バダラホ王とともに有能なジャサクとして今でもモンゴル人に慕われている。回民反乱軍をオルドスから撃退するのに，彼はモンゴル兵 500 人と壮丁らを率いて各地で奮戦していた（趙 1976: 14376;『穆宗毅皇帝実録』巻一百八：2755）。

カトリックのスキュート派の宣教師たちをオルドスへ招いたのもジャナガルディだとされている。1874 年 2 月 27 日に，ヴェールリンデンら一行がグン・エルゲン・ゴール（Gün Erge-yin Γool）にあった彼の宮殿を訪れている（Van Hecken 1949: 75）。

ハイシッヒが紹介した，清朝末期にシャンジミトブがジュンガル旗のジャサクになっていた頃に描かれた地圖では，「ジャサク貝子シャンジミトブが住まう砦，バヤン・タラという地」（jasaγ beyise Sanjimitob-yin saγuqu küriy-e Bayan Tala kemekü γajar）とあり，宮殿は砦（クレー）と称され，固定建築となっている（Heissig 1944: 170）。この固定建築の宮殿も回民反乱後にジャナガルディの命令で建てられ，後世では大営盤（ターインパン）と呼ばれていた（武 1986: 67）。

寺院：

ジュンガル・ジョー（Jegün Γar-un Juu-yin süme, ②）は画面の左上にある。この寺は北元末期の 1623 年頃に建てられたという伝承があり，オルドスでもっとも古い寺

院の1つになる。モンゴル名はエルデニ・ブリテクッグスン・スメ（Erdeni Büridügsen süm-e）で，チベット語名はガダンシャトロイバダラジャイリン（Γadan-šadrüibdarjayiling），漢語名は宝堂寺である（Narasun 2000: 3）。ハイシッヒが公開したジュンガル旗の地圖では，Satrubdarjayiling Juu と，チベット語名で表記されている（Heissig 1944: 169）。

このような由緒あるジュンガル・ジョーであるが，現在のオルドスに残る数少ない寺院の1つである。筆者は2004年と2005年にジュンガル・ジョー寺で二回ほど調査をおこなった。寺の僧たちによると，文化大革命中は人民解放軍が駐屯地として寺を利用していたため，破壊から免れたが，貴重な経典や仏像類はすべて焼かれたという。

4.6　オルドス左翼中旗（ジュンワン旗）

次にオルドス左翼中旗（ジュンワン旗）版圖内の風景（圖7）を一見してみよう。

ジャサクの宮殿オルド：

オルドス地域で唯一人ジュンワン（郡王）の爵をもつジャサクの宮殿オルド（jasaγ Giyün Vang-yin saγuγsan ordun, ①）は画面の左下にある。影壁の前には役人風の人物が1人立ち，遠くから馬に乗ってやってくる人を眺めているようだ。

バダラホが盟長だった頃のジュンワン旗のジャサクはエルチムビリク（Erčimbilig, 在位1837–1901）だった（趙 1976: 8438–8439, Van Hecken 1972: 150）。1863（同治二）年，甘粛や霊州の回民反乱軍が周辺へ拡散するのを防ごうとオルドス兵を清朝政府が動かそうとしたとき，エルチムビリクは病気を理由に消極的だった。盟長バダラホの再三にわたる催促にもかかわらず，期限に間に合わなかったことから理藩院に引き渡されて議処されている（『穆宗毅皇帝実録』巻五十九：1580）。

寺院：

ジュンワン旗領内ではチャガン・エルギンジョー寺（Čaγan Ergi-yin Juu-yin süm-e, ②）が画面の右上に描かれている。チャガン・エルギンジョー寺は現在のエジンホロー旗の西北部，タイジナルジョー郷内にある。乾隆年間に建てられた古刹で，1897（光緒二十三）年に皇帝よりビリク・トゥールクチ・スゥメ（Bilig Tegüligči süme）という勅命を与えられている。漢語名は慧通寺である。清朝末期には約80数人の僧がいたという（Narasun 2000: 47）。

ハイシッヒが発表した，1909年のジュンワン旗の地圖では，チャガン・ノハイト河（Čaγannoqaitu-yin γoul,「白い犬の河」の意）の近くに，ビリク・トゥールクチ・スゥメ（Bilig Toγuluγči süme）が建っている（Heissig 1944: 150）。寺院名のつづりが

現在と異なっている。

寺は中国の文化大革命中に打ち壊されている。

寺院の上方に，聖地オボー（③）が 1 つ立っている。

天幕と狩猟：

天幕は 2 ヶ所，画面の左上と右中央部にある。薪を背負い天幕へ帰ろうとしている人物がいる。版圖の一番下の方に，3 人の猟人が駿馬に乗って，ガゼルの群れを追っている。

4.7　オルドス左翼後旗（ダラト旗）

最後に，オルドス左翼後旗すなわちダラト旗の世界（圖 8）を見てみよう。

ジャサクの宮殿オルド：

「ジャサク・ダラト貝子（ベイス）の住まう宮殿オルド」（jasaγ Dalad beyise-yin saγuγsan ordun, ①）は画面の左上にある。眼隠し塀の影壁の前で，馬から下りた人物が役人にひざまずいて礼をしているところだ。オルドス・モンゴルは自他ともに「礼（yosu）に厳しい部衆」と認められている。1950 年代までは，年配の人や役人などに会ったときに馬から降りて跪拝しなければならなかったことを他の絵画も伝えている（楊 1994b: 120）。そうした時代の風景が活写されている。画面の景色は恐らくダラト旗のジャサクの宮殿オルドが長く置かれていたバラガソン・テンギス（Balaγsun Tinggis）の風景であろう。回民反乱軍がオルドスに侵入していたころのダラト旗のジャサクはサンジミドブ（Sanjimitob，在位 1856–1884）だった（趙 1976: 8444; Van Hecken 1972: 152）。

寺院：

ダラト旗領内にはオルドスの名刹ザンダンジョー（Zandan Juu-yin süm-e, ②）が画面右の中央部に描いてある。例外なく固定建築と佛塔で表現されている。

ナラソンによると，ザンダンジョー寺は康熙年間にダラト旗の第二代ジャサクのグルスゲベ（Gürüskib，在位 1657–1704）が建てたものである。チベット語名はラシナムジャルチョイグルリン（Rasinamjalčoyigürling）という（Narasun 2000: 193）。そのため，1740 年代初期に描かれた「オルドス七旗圖」でも「貝子（ベイス）ナムジャルスレンの祖父グルスゲベの寺」（beyise Namjalsereng-yin ebüge ečige Gürüskeb-ün süme）とある（Mostaert 1956: 96）。ザンダンジョーはダラト旗の度牒寺であったが，1941 年に日本軍の空爆によって完全に破壊された，とナラソンは伝えている（Narasun 2000: 193, 196）。

ザンダンジョー寺が破壊されたのは 1941 年でなく，1940 年 2 月末のことであろう。

それには次のような背景がある。日本軍が占領する内モンゴル西部の包頭を 1939 年 12 月 20 日，傅作義軍が襲撃した（内田 1984: 230; 張 2005: 157）。大本営は駐蒙軍が包頭以西への出撃を禁止していたが，傅作義を叩こうと，1940 年 1 月 14 日付で「現任務遂行」のために黄河を渡って西への進撃を許可した（内田 1984: 234）。ザンダンジョーには綏西から移防してきた寧夏のイスラーム軍人馬鴻賓の前線司令部が置かれていたため，日本軍の猛烈な空襲を受けた，と中国側の参戦者たちは回想している（韓 2004: 107–110）。このとき，オルドス最大の寺，ワンギンゴリンジョー（Vang-un Γool-un Juu，広慧寺）も燃えあがって廃墟と化した。ダラト旗のモンゴル人たちは当時，「鄂爾多斯蒙古挺進隊」をつくって日本軍への協力を惜しまなかったが，寺院が爆撃されるのを予想しなかっただろう。

ダラト旗領内でも，聖地オボー（③）が 2 つ画面上部と下部の真ん中あたりに 1 つずつ描かれている。

天幕と家畜：

天幕は計 3 ヶ所ある。いずれも木柵の中に設営した形となっており，1 つの柵の中に 3 つの天幕がある。そしてキー・モリがはためいている。

馬軍とラクダ，牛群が草原に点在している。ダラト旗はかつて名馬の産地として知られていた。

5　おわりに――奏凱圖の特徴

以上 7 幅からなるイケジョー盟盟長バダラホの奏凱圖であるが，7 旗の描き方に次のような共通した特徴が認められよう。

1．ジャサクの宮殿オルドはすべて中国式の固定建築でもって表現されている。建物群は住宅の軸線上に位置する庁堂を中心に，両脇に廂房を設け，正面に影壁を建てた構造となっている[14)]。オルドス・モンゴルの貴族たちが固定建築に住むようになった時期を示す具体的な資料を今のところ筆者はまだ把握していないが，19 世紀初頭からだという伝承はある（楊・新間 1995: 16–18）。回民反乱が鎮まったあと，貴族たちが率先して固定建築の宮殿を建てた例が多い。先に述べたジュンガル旗のジャナガルディの大営盤と，ウーシン旗の版圖内にある瑞雲寺を拡大改修したバラジュール公の邸宅，「西公シャン」（圖 9）などがその実例である。

宮殿オルドが固定建築であるのに対し，遊牧民の住居は純粋に天幕からなっている。2 張もしくは 3 張からなる天幕群を木柵がとり囲むような設営である。天幕と木

柵に一本ずつ，2 種のキー・モリが立っている。当時，牧人たちはまだ定住生活を知らなかった。

2. オルドス右翼前旗ことウーシン旗を除けば，各旗の版圖内に寺院を 1 つ描いている。ウーシン旗の場合，そのジャサク旗がイケジョー盟盟長だったこと，鎮国公バラジュールもジャサクではないものの，回民反乱軍の掃討に功績を立てたためか，ジャサクと鎮国公 2 人の菩提寺が 1 ヶ所ずつ登場している。寺院はすべてオルドスの名刹で，各旗のジャサクとつながりの強い寺が選ばれている。

奏凱圖の目的の 1 つは，旗同士の界址を再確認するためだったが，界址にあるはずのオボーと地名がない。いくつかのオボーはあったが，界址にあるようにはみえないし，名称もついていない。界址確認を標榜しながらも，そのような役割を果たしたとはいえない。もっとも重要な目的はやはり，「奏凱」つまり凱施と奏功にあったのだろう。

3. オルドス高原は西にバラル（balar）という起伏の激しい半草原半沙漠の高地が広がり，東は黄土高原につながり，そして黄河沿岸では広大な平原になる。奏凱圖も基本的に起伏の多い世界を呈している。そのような草原には馬，牛，ラクダそれに羊などの群れが点在し，ガゼルも生息していた。牧人は馬に跨って旅をし，役人や僧らも忙しく活動していた。

従来，ハイシッヒや二木，上村らが取りあげた境界圖には明確な方位方向が示され，正確で多数の地名をちりばめられている。絵画の場合，著名な画家シャラブ作の『モンゴルの一日』はモンゴル人の一生を季節と結びつけてつくりあげた絵画作品である。これに対し，バダラホの奏凱圖内のもっとも重要な内容はジャサクの宮殿とその菩提寺である。牧人の天幕や家畜もあくまでもジャサクを突出させるための装飾としての性格が強いように見える。

最後に，奏凱圖が創られた年代についての見解を示しておこう。筆者が入手した『圖開勝跡』のゼロックスコピーには同書の編集された年代を示す語句がない。ただ，同書に収録されている楡陽紳者撰の「重修楡林鎮城記」によると，回民反乱をきっかけに補修工事がおこなわれた楡林城の完成は「同治九年秋八月」となっている（『圖開勝跡』p 82）。

劉福堂軍門の一連の奏功行事に花を添える形で呈されたバダラホの絵圖も，同じ時期に作成されたのであろう。ときは同治九年，すなわち 1870 年秋だった可能性が高い。

1883 年 11 月，「聖なる殿様」バダラホ王が逝去した，とのニュースがウーシン

ジョー寺に伝わる。活佛らの高僧は彼の宮殿に赴き，7 日間の追悼法事が営まれた，と『ウーシンジョー寺縁起』は記している（Qassudu and Qasbiligtu 1989: 27）。彼の遺体は一族が眠るシャルリン・エンゲルという地に運ばれ，天幕の形をした墓兼祭殿が建てられた。1966 年，文化大革命が発動された年に，墓地は中国共産党の「革命大衆」に破壊された。

謝　　辞

本研究の元となる調査は，日本学術振興会科学研究費補助金によるプロジェクト「中国ムスリムの宗教的・商業的ネットワークとイスラーム復興に関する学際的共同研究」（研究代表者：松本光太郎，課題番号：17320141）の一環として実施された。貴重な文献を提供してくださったオルドス市ウーシン旗の奇景江氏に感謝を申し上げたい。また，3 人の匿名の査読者から大変建設的なコメントを頂戴した。併せて御礼を申し上げる。

注

1）　オルドス・モンゴルがどのように回民反乱に巻きこまれたかについては，楊（2007a）に詳しい記述がある。
2）　モンゴル時代の大元ウルスにおける絵画も含めた出版文化については，宮紀子による総合研究がある（宮 2006）。
3）　別の情報によると，バダラホの宮殿オルドは最初バダリン・ハラ・トロガイ（Badar-un Qar-a Toluγai）の南にあり，その後トジ（Toji）に移ったという（Būrinjirγal and Čaγandung 1985: 17）。
4）　モンゴルにおける絵画資料の人類学的解説と分析については，小長谷有紀・楊海英編『草原の遊牧文明』（1998）を参照されたい。著名な画家シャラブ作とされる『モンゴルの一日』などが詳しく検討されている。
5）　チャガライは「奏凱圖」を描いたバダラホ王の直系子孫である。
6）　楡林市近郊の西老爺廟に残る劉厚基が立てた「重修鎮邊関帝廟碑記」内のバダラホの文章では，2 人は長城以北の白鶴廟で会い，合同作戦の会議が開かれたとしている。
7）　本論文の冒頭でも触れたように，宣教師のヴェールリンデンは満洲語の地圖をオルドスから入手しており，当時のオルドスには満洲語のできる人材がいたことを示している。
8）　影壁とは伝統的な中国式邸宅の正面玄関前に建つ，目隠し塀のことである。
9）　この文献は現在オルドス市档案館に保存されている。
10）　大寨は，山西省昔陽県にある貧しい山村である。文化大革命中，地元の農民たちは山村を開拓して生産高を増やしたとされて（実際は水増しだった），全国の模範とされた。その模範から更に「牧区大寨」などの模倣版が創られた。
11）　キー・モリについては，Kelényi（2002: 79–101）による新しい論考がある。
12）　アルジャイ石窟はオトク旗西北部のアルブス山中にある遺跡である。遺跡は 2003 年に中国の重要文化財に指定されている（巴図吉日嘎拉・楊 2005; 楊 2007b: 44–58）。
13）　オルドス地域オトク旗におけるラクダの頭数変化とラクダの儀礼については，楊（2006: 493–532）を参照されたい。
14）　中国の住宅とその名称については浅川滋男著『住まいの民族建築学』（1994）を参照した。

文　　献

Altandalai
2004 *Yapon ba Öbür Mongγol*. Öbür Mongγol-un Surγan Kümüjil-ün Keblel-ün Qoriy-a.

Bürinjirγal and Čaγandung
1985 Üüsin Qosiγun-u Noyad-un Šang Yamun Bayirisiju Önggeregsen Tuqai. In *Üüsin Qosiγun-u Teüken Materiyal* No. 1, pp 16–18.

淺川滋男
1994 『住まいの民族建築学──江南漢族と華南少数民族の住居論』東京：建築資料研究所。

巴図吉日嘎拉・楊海英
2005 『阿爾寨石窟──成吉思汗的佛教紀念堂興衰史』東京：風響社。

Barkman, U.
2000 *landnutzung und Historische Rahmenbedingungen in der Äusseren Mongolei/Mongolischen Volksrepublik (1691–1940)* (Senri Ethnological Reports, No. 17). Osaka: National Museum of Ethnology.

Futaki Hiroshi and Kamimura Akira (eds)
2005 *Landscapes Reflected in Old Mongolian Maps*. Tokyo: Tokyo University of Foreign Studies.

橋本光寶
1942 『蒙古の喇嘛教』東京：佛教公論社。

韓哲生
2004 「馬鴻賓指揮的伊克昭盟之戦」文斐編『我所知道的馬鴻逵家族』pp. 107–110，北京：中国文史出版社。

Heissig, W.
1944 Über Mongolische Landkarten. *Monumenta Serica* IX: 123–173.
1966 *Mongolische Ortsnamen—Aus Mongolischen Manuskript–Karten Zusammengestellt von Magadbürin Haltod (I)*. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag Gmbh.
1978 *Mongolische Ortsnamen (II)*. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag Gmbh.

賀菊芳
1995 『紅石峡摩崖石刻』（楡林名勝　第一集）中共楡林地委宣伝部等発行。

金海
2005 『日本占領時期内蒙古歴史研究』呼和浩特：内蒙古人民出版社。

Kelényi, B.
2002 “May they Here Increase! May all Gather Together!—A Woodprint and Its Inscription from the Mongolian Collection at the Ferenc Hoppe Museum of Eastern Asiatic Arts, Budapest”. *Ars Decorativa* 21: 79–101.

小長谷有紀・楊海英編
1998 『草原の遊牧文明──大モンゴル展によせて』大阪：財団法人千里文化財団。

劉厚基
年代不詳　『圖開勝跡』

宮　紀子
2006 『モンゴル時代の出版文化』愛知：名古屋大学出版会。

Mostaert, A.
1934 *Ordosica*. Bulletin of the Catholic University of Peking 9.
1956 Carte Mongole des Sept Bannières des Ordos. In *Erdeni-yin Tobči (Mongolian Chronicle Part I)*, Cambridge, Mass: Harvard University Press.

Narasun, S.
2000 *Ordus-un Süm-e keyed*. Qayilar: Öbür Mongγol-un Soyul-un Keblel-ün Qoriy-a.

プルジェヴァリスキー
1939 『蒙古と青海　上巻』田村秀文・高橋勝之　共訳，東京：生活社。

Qassudu and Qasbiligtu (eds)
1989 *Üüsin Juu Süm-e-yin Tobči Teüke Orusibai*. Ordus-un Soyul-un Öb-ün Čobural 3.

Serruys, H.
1978　Twelve Mongol Letters from Ordos. *Zentralasiatische Studien* 12: 255–272.
Taveirne, P.
2004　*Han-Mongol Encounters and Missionary Endeavors: A History of Scheut in Ordos (Hetao) 1874–1911* (Leuven Chinese Studies XV). Leuven: Leuven University Press.
内田勇四郎
1984　『内蒙古における独立運動』福岡：朝日新聞西部本社。
Van Hecken, J.
1949　*Les Missions chez les Mongols*. Peiping: Imprimerie des Lazaristes.
1972　Les Princes Borjigia des Ordos Depuis Leur Soumission aux Mandchoux en 1635 Jusqu'a Leur Disparation en 1951. *Central Asiatic Journal* XVI: 132–155.
Van Oost, J.
1932　*Au Pays des Ortos(Mongolie)*. Paris : Editions Dillen et Cie.
Vreeland, III, H.
1962 (1973)　*Mongol Community and Kinship Structure*. Westport: Greenwood Press.
武　学敏
1986　「準格爾旗大営盤王府史略」『伊克昭盟文史資料』1, pp 66–71。
楊海英
1994a「モンゴルの集落生活と官員の来訪――絹絵に見る清朝時代のオルドス・モンゴル」『民族学研究』58 (4): 382–393。
1994b「絵画にみるモンゴルの伝統」『季刊　民族学』67: 116–122。
2001　『国外的刊行的鄂爾多斯蒙古族文史資料』呼和浩特：内蒙古人民出版社。
2002a「十九世紀モンゴル史における〈回民反乱〉――歴史の書き方と〈生き方の歴史〉のあいだ」『国立民族学博物館研究報告』26 (3): 473–507。
2002b『オルドス・モンゴル族オーノス氏の写本コレクション』大阪：国立民族学博物館地域研究企画交流センター。
2005　『モンゴル草原の文人たち――手写本が語る民族誌』東京：平凡社。
2006　「〈ラクダの火をまつる儀礼〉から民族誌の政治性をよむ――ネイティブ人類学徒の曖昧な喪失の視点から」『国立民族学博物館研究報告』30 (4): 493–532。
2007a『モンゴルとイスラーム的中国――民族形成をたどる歴史人類学紀行』東京：風響社。
2007b「アルジャイ石窟の継承寺バンチン・ジョーの調査報告――〈威儀奉行の報告〉という写本を中心に」楊海英編『シルク・ロード草原の道におけるアルジャイ石窟の歴史と文化――国際シンポジウム，2007 年 3 月 27 日　記録集』静岡大学人文学部。
楊海英・新間聡
1995　『チンギス・ハーンの末裔――現代中国を生きた王女スチンカンル』東京：草思社。
楊海英・奇錦江
2007　「長城沿線に残る〈中外一家〉の遺物――あるいは回民が反乱者だったときの話」『静岡大学人文学部人文論集』58 (1): 49–75。
Yang Haiying
1995　Une toile représentant des traditions Mongoles. In *Verbiest Courrier* IV, pp 1–11. Leuven: Katholieke Universiteit Leuven.
2003　*Subud Erike—A Mongolian Chronicle of 1835*. Cologne, Germany: International Society for the Study of the Culture and Economy of the Ordos Mongols (OMS e.V.).
張新吾
2005　『傅作義伝』北京：団結出版社。
趙爾巽等
1976　『清史稿』（第四十七冊）北京：中華書局。

編者不明
1964　『大清穆宗毅（同治）皇帝實録』台北：華聯出版社。
編者不明
1987　『清史列伝』（第一四冊　巻五三至五六）王鐘翰点校，北京：中華書局。

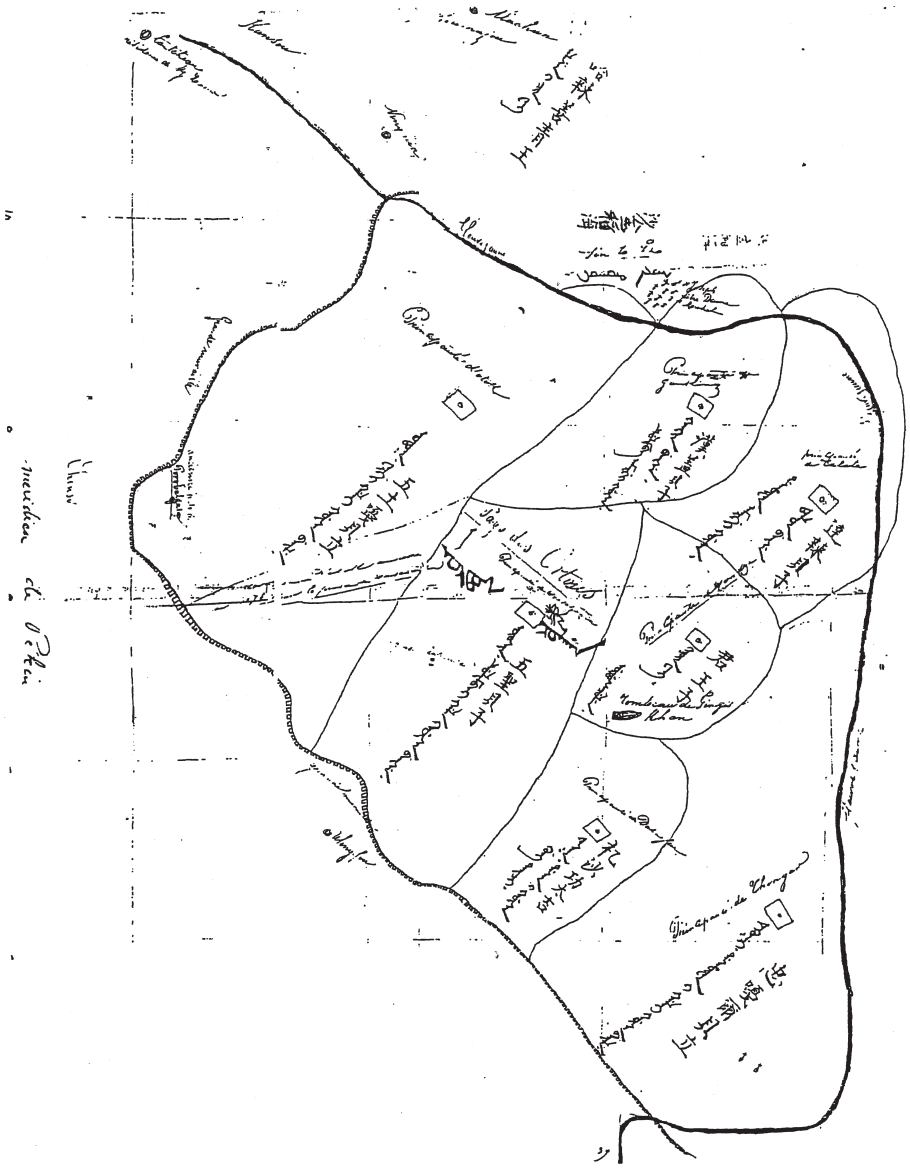

圖 1　ヨーロッパの宣教師らが入手したオルドス七旗の地圖
Taveirne 2004: p 232 より

圖 2　オルドス右翼前旗（ウーシン旗）

圖 3　オルドス右翼中旗（オトク旗）

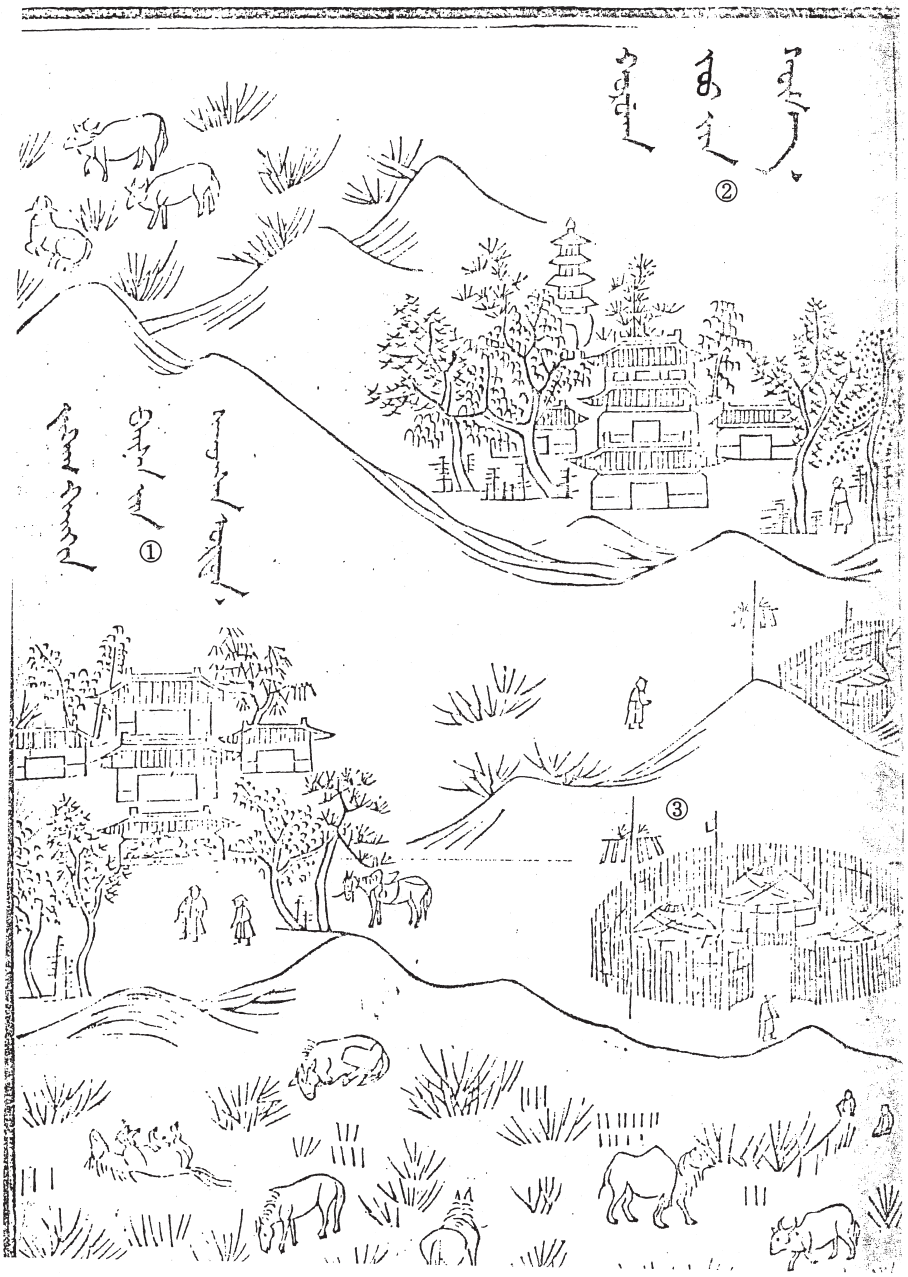

圖 4　オルドス右翼後旗（ハンギン旗）

圖 5　オルドス右翼前末旗（ジャサク旗）

圖 6　オルドス左翼前旗（ジュンガル旗）

圖 7　オルドス左翼中旗（ジュンワン旗）

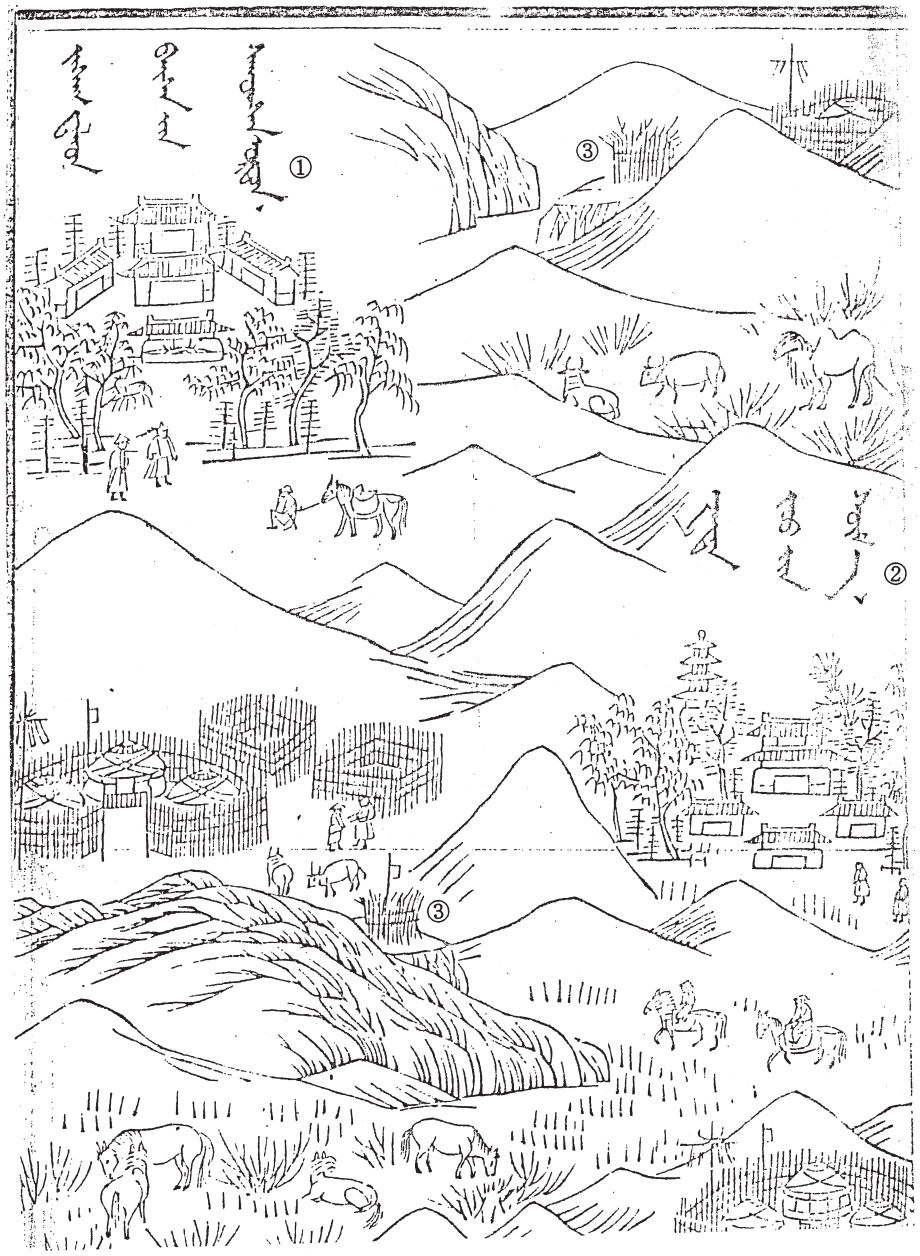

圖 8　オルドス左翼後旗（ダラト旗）